

植物学者郡場寛博士の履歴(7)趣味¹⁾

山内 智²⁾

On the Record of a Botanist Dr. Kwan Koriba. (7) – His Hobbies –

Satoshi YAMAUCHI

キーワード：郡場寛, 植物生理学, 趣味

1. はじめに

郡場寛博士(1882 – 1957)は、東北帝国大学農科大学教授であった1918年(大正7)に文部省から留学を命じられ、ヨーロッパ各地大学の植物学教室を歴訪し、その時得られた知見をもとに京都帝国大学に植物学教室を創設し、多くの研究者を輩出するなど、著名な植物学者である。2002年(平成14)に京都の自宅に保管されていた資料が一括して青森県立郷土館に寄贈された(郡場寛コレクション)。この資料を順次整理し、郡場寛博士の経歴、著作目録、国外留学、昭南植物園、東北帝国大学農科大学などについて報告してきた(山内, 2009, ほか)。以下敬称略)

郡場寛の父直世は弘前藩士で、明治維新時に士族の青森市への移住奨励で青森市栄町に転居した。青森市酸ヶ湯温泉を整備したことでも有名である。郡場寛は1882年(明治15)9月6日に青森市栄町で生まれた。造道小学校に入学し葭町小学校、荒川小学校と転校し、卒業後は青森県師範学校附属小学校に転入し、1895年(明治28)卒業した。その後、青森県第一尋常中学校(弘前市)に入学し、第二高等学校二部理科(仙台市)、東京帝国大学理科大学と進学した。卒業後は東京帝国大学理科大学、東北帝国大学農科大学、京都帝国大学等で教鞭を執っている。更に、京都帝国大学退官後に昭南植物園長、昭南博物館長(シンガポール)として、戦時中にはもともと同植物園に勤務し、そこでの多くの英国科学者との同等の調査研究は有名である(Corner, E.J.H., 1946)。国外留学・調査・視察や国際会議などでヨーロッパ、米国、南米、東南アジア等も歴訪している。更に、戦後シンガポールから帰国後弘前大学第二代目学長に就任し、文部省との交渉などに活躍した。

郡場寛の経歴が示すように日々多忙な調査研究、教職などを送っていた。その業績を支えたものは、多趣味で、研究の余暇には横笛、ヴィオリン、尺八、琴、三味線などの楽器演奏して疲れを癒やし、登山やスキー、水泳等で体力を保持(中沢, 1957b)したことが大きい。

郡場寛の趣味については、部分的に語られているがまとめたものはない。研究に対する姿勢に大きく影響し

た趣味について、当博物館に収蔵された資料や郡場寛に関わる論説や随筆等から知り得た事についてまとめた。

青森県立郷土館に郡場寛資料を一括してご寄贈いただいた故郡場是行氏、郡場央基氏、資料寄付にご尽力いただき、ご指導いただいている弘前大学医療技術短期大学部名誉教授千葉滋男氏、資料の笛についてご教示いただいた下田雄次氏並びに関係各位に心から感謝する。

2. 多様な趣味

郡場寛は、多くの趣味を持っていたことが知られている。音楽と撮影、運動に分けることができる。音楽は、夫人のお話だと「邦楽の方、好きでした」(郡場寛先生遺稿集刊行会, 1958)とのことで、特に笛と琴が好きであった。また、カメラによる撮影もよくされ、多くの写真を残している。運動は「自分には過激な運動より緩ゆっくり底力を出して行く運動の方が適している」(郡場, 1957b)と歩くことやスキーが一番であった。以下個々にまとめてみた。

(1) 音楽

1) 笛

郡場寛コレクションには、13本の笛がある(図1)。この中に何種類かの笛があつて、3本は東南アジアのものと思われる縦笛(図1, 下3本)で、指穴は6孔で唄口が無く、一方の管頭は開いているが、もう一方は閉じていて端の横に小穴が開いている。郡場寛は昭南植物園長(シンガポール)として、また東南アジア各地での調査・視察など歴任しており、その時に購入した可能性が高い。

また他の10本は国内で製作された笛と思われる。日本の笛の指穴は6孔または7孔である。図1上2本目と上10本目の2本は指穴が6孔であるが、他は全て7孔である。また、図1の一番上の笛は指穴が7孔であり、樺巻方などの形態から能管のようである。他の9本の笛について更に詳しく見ると、漢数字のある4本の笛がある(図1の上3～6本目, 図2)。この笛の管頭に音程を示す六、七、八、十の漢数字が書かれている。本来は

1) 青森県の自然誌に関する調査研究(30)、郡場寛博士コレクションに関する調査研究(11)

2) 青森県立郷土館(〒030-0802 青森市本町2丁目8-14)



図. 笛と琴

1. 笛 (13 本)
2. 漢数字入り笛
3. 百川四代一 (左) と郡場寛 (右)
1900 年 (明治 33) 9 月 9 日, 仙台市で撮影
4. 郡場家の練習用琴
5. 琴のの琴爪 (丸爪), 柱, 小箱 (角爪 3 個在中)

1 2 種類の音程があることから, 他の音程の笛も購入していたかも知れない. 他 5 本については, 指孔の大きさがほぼ同じで唄用ではなく囃子用と思われる.

郡場寛が笛を習ったのは, 弘前で下宿生活をしていた青森県第一中学校在籍中 (鈴鹿, 2001) で「1895 (明治 28) 13 才, 笛を百川に習う」(郡場寛先生遺稿集刊行会, 1958) との記述がある. 名字のみで人物を確定できないが, 遺品の中に仙台市の写真屋で 1900 年 (明治 33) 9 月 9 日撮影の百川四代一と一緒に写った写真が残されている (図 3). 更に「百川四代一の父」と裏書きされた写真もあって, 弘前藩士の儒者百川学庵 (1799-1849) の子孫であると思われる. この友人かその父から習った可能性が高い. また, 記録は見つからなかったが, 当時父直世が経営していた酸ヶ湯温泉職員で, 八甲田山案内人として著名で郡場寛も幼少期から面倒を見てもらっていた笛の名手鹿内辰五郎 (1880 - 1965) からも教わった可能性は大きい.

郡場寛の夫人によると「月が出るとトットットと二階

に上がって横笛を吹いていました」(郡場寛先生遺稿集刊行会, 1958) と語られ, 絶えず手元に笛を置いていたことが分かる.

京都帝国大学定年退官後, 昭南特別市 (シンガポール) の昭南植物園長・昭南博物館長として就任した時も笛を持参し「シンガポールに在任中にも愛用の笛を手元から離さず, 南国の月明下にも笛を吹いて, 遠い故郷の若き日を偲んだこともあった」(中沢, 1957c) と言われている.

弘前大学学長 (1954 - 1957) で多忙の中, 1956 年 (昭和 31) には望まれて「NHK の歳末名士隠し芸大会に出て得意の横笛 (ネブタ笛) を吹いた」(木原, 1970). 当時, 郡場寛の笛がうまいことは周知の事実であったことが分かる. また, 歳末には毎年, NHK の歳末助け合いに寄附金も託していた.

郡場寛が忘れられない横笛演奏について, 弘前市で「カリの渡る秋の月夜. 招魂社の境内で, 岩木川のせせらぎを聞き, 下町のキヌタの音に合わせて吹いた横笛はいまも忘れないね」(郡場, 1955) と述べている.



図. ヴィオリン

6. ヴィオリンと ヴィオリンケース
7. ヴィオリンケース貼附名刺
8. ヴィオリンケース貼附日本郵船シール
9. ヴィオリンケース貼附旅館シール

2) 琴

郡場寛コレクションに郡場家の練習用の短い琴がある(図4)。付属品として琴爪、柱、爪入小箱(津軽塗り)(図5)も残されている。郡場家の子供達が代々使ってきたものである。琴爪は先端が丸い山田流6個と平たい生田流3個が残っている。両流派の琴爪があり郡場家での流派は不明である。

郡場寛が琴を習ったのは「県立一中に入学し、弘前市塩分町の親戚、野村宅から通学した」(中沢, 1957a), 「1899(明治32)17才 ハーモニカ, 琴けいこ」(郡場寛先生遺稿集刊行会, 1958)と述べられている。青森県第一中学校在学中に野村みねから手ほどきを受けていた。指導は受けていないが、親戚の叔母に琴の先生をしていた方もいた(鈴鹿, 2001)。

弘前市から離れても琴の練習は続けていたと推測されるが「父は琴が好きで京大を定年で退職した時、その記念講演会のあと六段の調べを披露した」(鈴鹿, 2001)と言う。

また、野村みねへの信頼は強く、弘前大学学長時代には、「青森市には県立中学校が無く、弘前で下宿生活を過ごすことになった。後年、父が弘前大学の学長をしていた時、私をともなって下宿先であった野村家をたずねたことがあった、・・・さっさと靴を脱いで我が家のように入って行った」(鈴鹿, 2001)とその時の様子が語られ

ている。更に、1956年(昭和31)には「弘前中学時代に琴を習った、下宿先の野村みねさんと2人で50年ぶりに合奏してみた」(木原, 1970)とも述べられている。郡場寛にとって野村みねとの合奏はとても幸せな一時であったと思う。

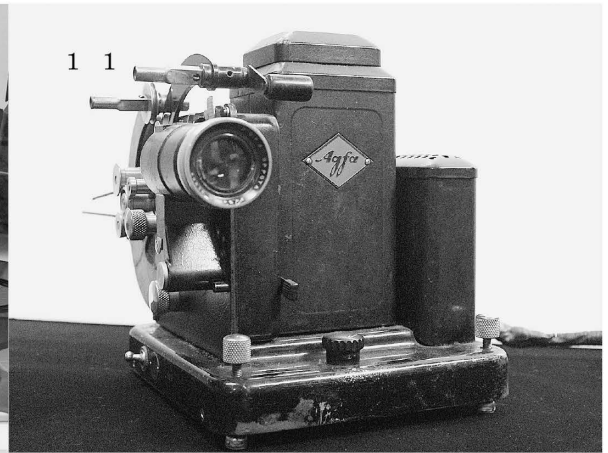
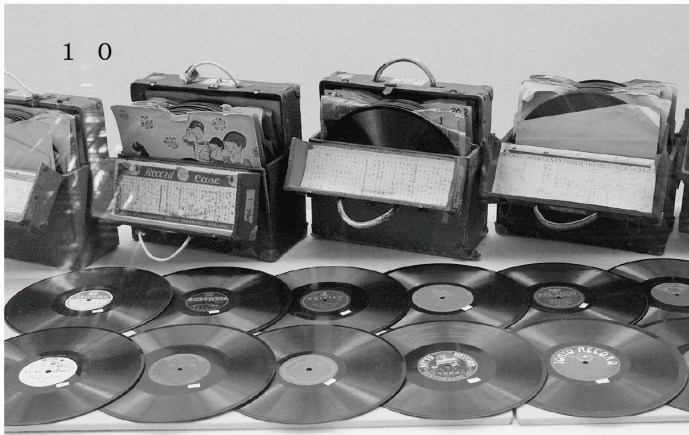
3) 三味線

郡場寛コレクションには三味線は残っていないが、三味線もかなりの腕前で「ある宴席では芸者の三味を借りて越後獅子をひき、一座をあつといわせたこともあったと伝えている」(成田, 1958)。郡場寛先生遺稿集(同刊行会, 1958)によると「三味線はお茶屋へ習いにいった」と述べられている。詳しい記録が少なく不明である。

4) ヴィオリン

郡場寛コレクションには、ヴィオリンが保管されている。以前に郡場家からみちのく歴史人物資料館(弘前市)に貸し出され展示された。同資料館が2014年(平成26)に閉館後は青森県立郷土館に保管されている(図6)。

郡場寛直筆の青森県師範学校附属小学校でのことが書かれた下書きの原稿が残されている。それによると「私たちが高等三年の頃、師範へ音楽学校卒業の唱歌の先生が来られ、此時始めてヴィオリンなるものを聞き、此先生から新しい唱歌も沢山教わった」と記述されており、小学校高等科3年生の時に初めてヴィオリンと出逢ったようである。その後、旧制富山高等学校校長で郡場寛と



図、音楽、撮影、スポーツ

1 0. レコードと保管ケース

1 1. 映写機

(アグファ・ゲバルト株式会社製)

1 2. スキーを持つ郡場寛 (左)

(瑞西グリンデルワルド村のホテル前にて)

は同郷で第二高等学校（仙台市）の同窓でもあった成田秀三（1958）によると「氏は音楽を好み大学時代にはヴァイオリンを熱心に稽古し、かなり上達したらしい」と述べており、東京帝国大学理科大学在学中には毎日のように練習していたことが伺われるが、しかし誰から習ったのかは不明である。

このヴァイオリンのケースには、3枚のシールが貼られている。ただし、このシールが同時に貼られたのか、何時貼られたかは定かでない。1枚は京都帝国大学教授の名刺が貼られている（図7）。1920年（大正9）8月20日に同大学教授の辞令を受けていることから、この日以後に貼られたことになる。また、日本郵船のシール（図8）と神戸の旅館のシール（図9。同じシールが別の鞆にも1枚貼附）が貼られていた。このことから客船に乗船時にヴァイオリンを持ち込んだことが分かるが、年月日の記入は無く何時であるかは不明である。また、ヴァイオリンを持参して神戸の旅館に宿泊したことも裏付けられた。

5) レコード

郡場寛コレクションにはレコードが保管ケースなどに入って289枚ある（図10）。クラシックから民謡、長唄、童謡、歌謡曲など幅広いジャンルで、京都で買ったり、出張時に各地のレコード店から購入したり、取り寄せたりしたものと思われる。また、外国のレコード会社のものもあり、国外視察等の時に購入した可能性もある。当

時の蓄音機については郡場家で確認できなかった。

このレコードには、京都帝国大学学歌、同志社学歌や紀元2600年奉祝楽曲なども含まれている。また童謡も多く、次女の鈴鹿三和子さんが「音楽の好きな父は童謡のレコードを良く買ってくれた。時には大丸デパートに連れてもらい、何枚かかけて聞き2〜3枚買ってもらったのであった」（鈴鹿, 2001）と当時のことを回想している。

(2) 撮影

1) 写真

郡場寛コレクションには多くのネガフィルムと写真がある。その撮影は海外調査、八甲田山地、植物、家族と多方面に及んでいる。同僚や友人たちから貰った写真も含まれている。ただし資料にはカメラなどの機材は含まれていない。

写真の現像・焼き付けは郡場寛自身の他に京都帝国大学等で依頼していた（木原, 1968）。京都の自宅では、郡場寛は二階の部屋を使われていて、流し場などもありここで現像等していたと思われる。

南米の国外視察（1931－1932）では、1,200枚くらい写真を撮影した（木原, 1966）。その写真を、1948年（昭和23）6月7日の京都大学理学部植物学教室で毎週月曜日に行われていた弟子達との会食談話の会（1946年10

月26日～1954年2月3日)で、撮影した写真を示してサボテンのことなどを愉快地話していた(木原, 1966)。

しかし、京都帝国大学定年後に赴任した「シンガポールでは写真は?イヤ。一つもとらなかったですよ。植物園に行ったらあると思っていたら写真機がないのですね」(木原, 1970)。と述べており、他地域と比べても遺品中には写真は殆ど残されていない。

カメラでの撮影は特に好んでされていたようで、調査や旅行には必ず持参していた。

2) 動画

郡場寛コレクション中に、アグファ・ゲバルト株式会社製の映写機が一台(図11)あるが、撮影機はなかった。そのほかに、郡場家にはフィルムが5巻残されており、中南米の調査(1931年)のカワゴケソウや家族が映っている。中沢(1957b)によると「中南米方面の探検で・・・各地の植物の生態をカメラや当時まだ珍しかった16ミリで撮影したりした」ことが述べられている。しかしその後の動画の撮影等の資料は見つからなかった。

昭和初めフィルム購入や現像などから考えて個人での利用は難しいと思われる。カメラほど熱心に撮影しなかったとも考えられる。

(3) 運動

1) 登山

郡場寛は幼い頃、体があまり丈夫ではなかったが、八甲田山酸ヶ湯温泉には温泉を経営していた両親とよく行っていた。8歳の時に、母に頼まれた書類を持って酸ヶ湯から自宅のある青森市栄町まで一人で歩いて帰った(鈴鹿, 2001)こともあり、健脚であった。「ぼくが丈夫になったのは、中学へ上がってから、酸ヶ湯を足場に八甲田山登山を試みたから」(郡場, 1957a)であるとも述べている。

「1895年(明治28)13才、7月初めて酸ヶ湯大岳登山」(郡場寛先生遺稿集刊行会, 1958)をしたが、「一行は二つ年上の従兄と人夫2人の4人連れであった」(郡場, 1957c)。当時は酸ヶ湯温泉から大岳への登山道は整備されておらず、竹やぶ漕いで山頂まで登った。この人夫には鹿内辰五郎も入っていたと思う。また、薦温泉に居住していた著名な歌人大町桂月(1869－1925)とは、3回会っている(郡場, 1957a)。大町桂月の「花の八甲田」に、1922年(大正11)夏に酸ヶ湯温泉の鹿内辰五郎の案内で青森市城ヶ倉溪流と一緒に散策したときに、郡場寛は先頭に立って景色を撮影したり疲れること無く歩いていたと書かれている(木原, 1968)。その時の写真も残されていて(木原, 1968)、健脚だった郡場寛を物語っている。

郡場寛の健脚を示すかのように「明治35年には東北横断大旅行と称して、6月23日に仙台を出発し、小牛田、古川、鳴子から緒形・酒田・鳥海山・湯田・本庄・

秋田をへて7月4日に能代に到る徒歩旅行」(鈴鹿, 2001)で能代から汽車で青森に帰っている。同行は4人(郡場寛先生遺稿集刊行会, 1958)であった。また、海外留学中(1918－1920)には英国のベン・ネブリス山や瑞西のユングフラウ等に登山している(郡場, 1956; 山内, 2011)。

後年、郡場寛は「山登りは非常な満足を与えた」(郡場, 1957b)と回想している。

2) スキー

郡場寛コレクションにスキー板等はないが、文献資料にはスキーのことが多く書かれている。

スキーを始めた経緯等についての資料は多く、「大正2年、東北帝国大学農科大学の講師になり、そこでスキーを始めた。30を越してからです」(郡場, 1957a)と述べている。それまでは冬は「下駄スケートぐらいしかしなかった」(木原, 1968)そうである。東北帝国大学農科大学に赴任したとき、郡場寛は、当時植物調査で道内の林野や山岳地帯を隈無く踏破していたが、趣味として冬はスキーを楽しんでいた。教え子でスキーが大変堪能な当時学生の本原均や岡見聞多について『此両君は僕の教えた学生であるがスキーは僕の先生である』(郡場, 1966)とスキーを両氏から習得したことを回想している。同様に京都大学名誉教授で全日本スキー連盟会長を歴任された本原均(1893－1986)も「スキーでは私が先生を「誘惑」したのである」(木原, 1966)と語っている。

ただし、1918年(大正7)2月「八甲田山に初のシュプールを印している」(中沢, 1957b)が、その時遭難騒ぎも起こしている(山内, 2015)。またスキーで骨折もしており「昭和7年頃、本原均達と洛北の花背にスキー行つて、骨折して足を包帯で巻きみんなの肩を借りて帰ってきた。」(鈴鹿, 2001)と当時の様子が述べている。

また、海外留学中(1918－1920)には米国イリノイ州ケアリーのスキー場でスキーを堪能している(山内, 2011)。1919年(大正8)12月には瑞西のグリンデルワルド村のホテルの前でスキーを持った郡場寛の写真(図12)が遺品の中に残されている。同様のホテル前の写真がメンバーを代えて生物学閑話Ⅳ(木原, 1970)の口絵にも出ている。瑞西でもスキーをされていた。

弘前大学学長時代の、1956年(昭和31)10月19日「弘前大学のヒュッテが大鰐スキー場にでき、その開所式に滑り初めをやると京都からスキーを持ち帰っていたが、たまたま弘前市内で転び、足を痛めて初滑りは残念ながら実現しなかった」(鈴鹿, 2001)。このスキーは遺品の中にはない。

郡場寛のスキーはどのような滑りをしていたのだろうか。「スキーは無鉄砲で直滑降を専門としていた」(鈴鹿, 2001)そうである。

3) 水泳、ボート

郡場寛は水泳も大得意であった。それも「海の遠浅の所は気持ちが良い、プールでは泳ぐ気はしない」(木原,

1970)と自然の中で泳ぐのを好んでいた。青森市の堤川沿いに住んでいた頃、「ボクは13才のときはどこまでも泳げる自信がありましたよ。ボくらの方、湾があって、初め家から小川で泳いで、それから海に行って、それからまた小川を泳いで帰ってくるんだ、その水はきれいで、のんだものですが」(木原, 1970)と振り返っている。青森市堤橋辺りから海まで往復したと述べている。

また、「仙台時代にはボートや水泳にも熱中する時期があったようである」(鈴鹿, 2001)。この時期に水泳と共にボートも習得している。

遺品の中には米国留学中(1918 - 1919; 山内, 2011)の水着姿の写真がある(生物学閑話IV(木原, 1970)に掲載)。友達と良く泳がれていたようである。

3. 終わりに

郡場寛は、上記の他に国内外の絵葉書や地図の収集、ハーモニカ(鈴鹿, 2001)、長唄(中沢, 1953)尺八(中沢, 1957b)等の趣味もあった。植物生理学・生態学に関する調査研究をする傍ら、多くのことに興味を持ち熱中する姿は研究姿勢に繋がる部分がある。多様な趣味をすることで自身の体調を保っていたと思われる。

郡場寛は「隠居するまでは晩酌はしないと言っていたが、隠居する時を待たなかった」(鈴鹿, 2001)、1957年(昭和32)惜しまれながら75歳で他界された、多くの方々が弔問に訪れ、弘前大学葬がいとなまれ、追悼文が学会誌や新聞に掲載された。他界後、1983年(昭和58)には戦時中に昭南植物園で共に研究したケンブリッジ大学名誉教授のコーナー博士が郡場寛の墓参りのためにイギリスから夫婦で来日されて墓前にたたれ、郡場寛の生前を偲んだ(千葉, 1984)。

郡場寛が一番好きで趣味として吹き、何時も手元に置いてあったのは横笛であった。葬儀の時「弘前の通夜の席で・・・酸ヶ湯の鹿内辰五郎が思いを込めて笛を吹いてくれた」(鈴鹿, 2001)。笛の音色は郡場寛にとって最高の葬送の調べだった。

引用文献

- Corner, E.J.H. (1946) Japanese men of science in Malaya during Japanese. *Nature*, 158: 63.
- 木原均編 (1966) 生物学閑話Ⅱ. 293pp. 廣川書店, 東京.
- 木原均編 (1968) 生物学閑話Ⅲ. 286pp. 廣川書店, 東京.
- 木原均編 (1970) 生物学閑話Ⅳ. 285pp. 廣川書店, 東京.

- 京.
- 郡場寛 (1955) 街の風流人②横笛. 陸奥新報, 昭和30年9月28日.
- 郡場寛 (1956) ユングフラウの想出, 弘前大学学報, (72): 14.
- 郡場寛 (1966) 八甲田山スキー跋涉記. 木原均編, 生物学閑話第Ⅱ集, pp.255 - 260.
- 郡場寛 (1957a) 閑話有題 (107). 東奥日報, 昭和32年11月9日.
- 郡場寛 (1957b) 新入生諸君へ. 弘前大学新聞, 昭和32年5月27日.
- 郡場寛 (1957c) 八甲田大岳の初登り. 陸奥新報, 昭和32年12月24日.
- 郡場寛先生遺稿集刊行会 (1958) 郡場寛先生遺稿集. 299pp.
- 成田秀三 (1958) 畏友, 理博, 郡場寛君. 二高尚志, 24(2): 29 - 32.
- 中澤潤 (1953) 青森県出身の生物学者(2) 郡場寛先生. 進化, 5(2): 18 - 20.
- 中沢潤 (1957a) 郡場学長の面影(上), 陸奥新報, 昭和32年12月21日.
- 中沢潤 (1957b) 郡場学長の面影(中), 陸奥新報, 昭和32年12月22日.
- 中沢潤 (1957c) 郡場学長の面影(下), 陸奥新報, 昭和32年12月23日.
- 鈴鹿三和子 (2001) 父・郡場寛ーなつかしの日々ー. 26pp. 自刊.
- 千葉滋男 (1984) E.J.H.コーナー博士の来学に寄せてーその2. 弘前大学学園だより, (65): 4 - 8.
- 山内智 (2009) 植物学者郡場寛博士の履歴. 青森県立郷土館研究紀要, (33): 28 - 34.
- 山内智 (2010) 植物学者郡場寛博士の履歴(2) 昭南植物園. 青森県立郷土館研究紀要, (34): 19 - 26.
- 山内智 (2011) 植物学者郡場寛博士の履歴(3) 1918 - 1920年の国外留学. 青森県立郷土館研究紀要, (35): 31 - 36.
- 山内智 (2014a) 植物学者郡場寛博士の履歴(4) 著作目録. 青森県立郷土館研究紀要, (38): 15 - 20.
- 山内智 (2014b) 植物学者郡場寛博士の履歴(5) 昭南植物園(2). 青森県立郷土館研究紀要, (38): 21 - 26.
- 山内智 (2015) 植物学者郡場寛博士の履歴(6) 東北帝国大学農科大学. 青森県立郷土館研究紀要, (39): 41 - 47.